

## 第五章 関西学院大学のころ

### 生涯で最高のよき時代

昭和三十六年四月、関西学院大学商学部に入學した。国公立大学の合格発表後に、下宿探しを始めたため、大学周辺により下宿先が見つからず苦労した。このとき、同じように四国の徳島から来て、下宿を探していた宮内敏雄君と知り合った。その後、何かと馬が合い生涯つき合う仲になった。

大学から少し離れた、西宮市上が原十番町の上月荘じよげつそうという三十部屋もある大きな下宿の一部屋が空いていた。大学やバス停から少し離れていたが、朝食と夕食がついているのが魅力であった。昼食は学生食堂で摂る。ここに二年間お世話になった。

経営者は三田市の農家で、おばあさんと中学生の娘さんがいた。別棟の漬物部屋の二階で、いつもだれかがマージャンをしていた。関学に入ってマージャンを知らないのは単位を落としたいものだが、私はマージャンをしなかった。



大学生の頃。愛車と

三年生になってから、大学前の「田中荘」に移った。宮内君の下宿のすぐ近くで、賄い付ではなかった。三食とも外食か自炊になったが、建物は新築で、十部屋の下宿であった。大家さんの田中さんご夫婦には大変よくしていただいた。大学院を含め、四年間お世話になった。

一年〜二年の教養課程は、のびのびと好きなように過ごした。この頃はホンダのカブに乗っていた。商学部校舎近辺の移動は、徒歩で行ったが、ほかの施設へはいつもカブで移動した。大学構内で単車に乗っていたのも、杖をついていたのも私一人であった。

関学は、キリスト教主義による教育を理念とする学校であるため、必須科目に「キリスト教概論」という授業があり、初めて新約聖書と讃美歌を手にした。教養は授業で聞いたくらいではよく分からなかったが、かなり長い間、学校の近くにあった関西学院教会の日曜学校に通った。

上月荘の隣に、関学の神学部の事務長で、家族全員がクリスチャンの松山清次さんが住んでいて、何回か伺った。応接間にはピアノがあり、関学の文学部の学生で、マンドリンクラブに入っていたマドンナがいた。まるで別世界の住民のように思えた。

奈良県の吉野から来て、大学の学生寮（啓明寮）にいた森田好和君は、大学卒業後クリスチャンの奥さんと結婚し、洗礼を受けた。彼は伊藤忠商事の部長職を勤め、定年でやめた後、東京神学大学に入学、同大学院を経て、今は東京都江東区で牧師をしている。

彼とはゼミは異なつたが長く懇意にした。伊藤忠商事の部長時代、東京・帝国ホテルの「なだ万」で何回かごちそうになったことを思い出す。当時は、彼も元氣、私も元氣、東京へは何度か研修に行き、その度ごとに会っていた。

課外活動は、「会計研究会」に入った。一年生のときは先輩に簿記を教わり、二年生になると後輩に簿記を教えた。当時の会計科目は、商業簿記、工業簿記、財務諸表論、原価計算論、管理会計、監査論に分かれていた。研究会での研究分野は、自分で選べばよいので原価計算論を勉強していた。

日本商工会議所の簿記検定は、三級から一級まで順に合格した。特に、一級は実力維持と記録作りに挑戦し、大学二年生の秋から計五回受け、そのうち合格したのは三回であった。そのほか、三年生のとき、泉大津の田端信行君らとJ・ダーティンの『原価分析と予算統制』の一部を勝手に翻訳し冊子にした。

学生だけの研究発表会があり、大学二年生のときに、第八回全日本学生会計研究会（三十七年七月 同志社大学）、大学三年生のときには、第九回全日本学生会計研究会（三十八年七月、

中央大学)、大学四年生のときには、第二十二回西日本会計研究会(三十九、五月、名城大学)、第十回全日本学生会計研究会(三十九、七月、関西学院大学)、第二十二回西日本会計研究会(三十九、十一月、西南学院大学)に参加したときの集合写真が残っている。

第二十二回西日本会計研究会では「階層別管理会計に関する一考察」について発表し、記念に硝子ケース入りの立派な「博多人形」をいただいた。今も自宅の遠い棚に置き、大事にしている。あどけない童女が片足をあげ、無邪気に踊っている可愛い博多人形を見た父がえらく感動していた。後に「足が上がればどれだけ嬉しいことか」と涙ぐんでいたと母が言っていた。

三年生になると専門課程になり、同時に所属したいゼミを選ぶ。関学の商学部では、会計の青木倫太郎先生と、経営学の池内信行先生の二つのゼミが特に有名であった。その他、簿記史の小島男佐夫先生、マーケティング論の三浦信先生、神戸大学から来られた経済学の宮田喜代蔵先生、経営学の小林喜楽先生など、商学部の全分野に全国的に有名な教授陣が揃っていた。

私は会計学を選び、青木ゼミに入れてもらった。当時の受験雑誌は、青木のガンバリズム、池内のアカデミズムと紹介していた。お二人が築かれた関学の会計学と、ドイツ経営学の研究業績とその伝統は、今日に至るまで引き続き高い評価を誇っている。

青木先生の管理会計や、監査論の講義はレベルの高いものであった。それ以外にゼミ生の研究発表会があり、青木先生やそのお弟子さんたちも参加された。毎年夏休みには高野山の宿坊



恩師・青木倫太郎教授（右）からいただいた卒業記念（左）

「福智院」で、大学・大学院合宿ゼミが行われ参加した。三年生のときには宮崎へゼミ旅行をした。四年生になると、卒業発表会が、有馬温泉の「兵衛」で行われた。また、卒業旅行は、富士五湖から伊豆半島巡りをし、河口湖と三島のホテルで合宿をした。当時は既に日本の高度成長が始まっており、社会全体に元気がみなぎって、学生生活も本当に楽しいものであった。

大学に学んでよかったと思うのは、よい友だちが大勢得られて、いろいろな体験ができること、本が読めること、あるいは本の選び方と読み方を勉強できること。この二点だと実感した。

ゼミ以外でも、よく旅行した。全部で一〇〇泊一二〇日くらい旅行した。春休み、夏休みは毎回、ゼミのグループばかりでなく、ゼミ以外の友人からの誘いにも積極的に参加した。

九州、四国、出雲、軽井沢、日本ラインなど、毎回七〜十日程度、北海道を除き、あらゆるところを旅行した。北海道は社会人になってから何回も行っているが、「日本海」という大阪



伊豆大島・三原山噴火口を馬に乗り観光

発の急行が常に満員で、切符が取れず行きそびれた。

二年生のときには単車で、西宮・京都・大津・彦根・米原を経て、日本最古の醒井養鱒場（滋賀県）まで行った。単車であるから、もちろん一人である。三年生のときには九州へ一人旅をした。十八日間・九州周遊切符で普通列車の旅。ほとんど駅前旅館か、ユースホステルに泊まったが、鹿児島では鹿児島大学の学生寮に泊めていただいた。

途中、一人旅をしている他大学の学生と仲良くなり一緒に旅行したこともある。四国一周旅行では、船と列車、バスを乗り継いで、徳島県海部郡の宮内君のお宅に伺って泊めていただいた。

旅先ではいつも誰かに助けられていた。鳥取砂丘や、伊豆大島の三原山で、馬に乗って周遊している写真が残っている。本州最先端の竜飛岬や、能登半島の狼煙の灯台に行ったこともある。ひとりで行けるところではなく、みんなが私を助けてくれた。

いつも思うのだが、経験とか体験において、一と二の差はただの一であるが、一とゼロの差は無敵大だと思う。た

たとえば、どこかに旅行を一回した人と二回した人の差は一であるが、一回した人と一回もしたことのない人の差は無限大だと思う。若いときの、初めての経験や体験は本当に貴重である。

大学三年生のときから、計五回公認会計士の試験を受けた。会計士試験と同時に税理士試験も受けており、運よく四年生のときに二科目合格していた。受験生の中では一番早かった。これで、「もし公認会計士になれなくても税理士にはなれる」と父や母に話していた。しかし、もし失敗すれば逃げ込める道、つまり退路を作っておいて、それ以上の高い目標貫徹などあり得ないと後に思い知らされることになった。

何でもそうだと思うが、退路を遮断して、自らを徹底的にハングリーにしなければ大きなことはなしえない。事業経営でも、いざというときは、家族もろとも全財産を投げ打って生死をかけるくらいの気概がないと大望の実現は難しい。退路を準備しておいての計画など、所詮それは甘えである。

大学を卒業してどうしようかと迷った。当時、父が勤めていた神戸銀行の調査部に就職し、研究職に就きたいと思った。しかし、そのような就職は困難であると分かり、それではもう少し勉強を続けようと思ひ大学院に残った。

大学院では助手補といって授業料免除、毎月一万円の手当がある商学部勤務の大学職員に採用された。入学試験や学部生の試験監督と雑誌と図書の整理が仕事であった。

後に、アメリカ西海岸四都市を二人で旅行することになる二級先輩の来住元朗さんと、試験監督で一緒になることが多かった。彼は関学の博士課程を単位取得満期退学して近畿大学教授になった。大学院に入ると、商学部校舎前の池の淵にあった教職員食堂に入ることができ、楽しい時間を持つことができた。

この二年間は本当によく勉強した。会計学、特に、財務諸表論・原価計算論・監査論の多くの基本書、商法、経済学、経営学などの定番書『会社法・鈴木竹雄』『近代経済学・塩野谷九十九』『経営学・古川栄一』など片っ端から読了した。ほとんどが公認会計士の試験科目であるが、当時勉強したこれらの知識は生涯の財産になった。大阪駅前の旭屋書店の専門書コーナーで、本の背表紙を眺めていた頃が懐かしい。

私は大学院に残って勉強を続けたが、小島ゼミの梅原利一君は、大学院に入らず、公認会計士試験の受験準備のため、ひとり隠岐の島で一年間受験勉強することにした。極めてリスクの高い選択であるが、退路遮断で勉強すると言って隠岐の島に行った。なぜ隠岐の島なのか分からない。島の教育委員会に行つて、一年間勉強するから空き家を世話してくれと頼んだらしい。失敗すれば、会計士になれないのはもちろん、税理士にもなれないであろう。全くの退路遮断である。親にはずいぶんあきれられたと思う。

彼から「夏休みに隠岐に来ないか」と誘いがあったので出かけた。当時の西郷町（現在の隠



岐の島町)の民家の空き家で、ひとり自炊して勉強していた。頭は坊主刈り、本当にびっくりした。

彼は、島の西郷中学校の先生と仲良くなっていたので、中学生数名を連れて、漁師に漁船を借り、沖にサザエ獲りにつれて行ってくれた。満潮時には沈んでしまふ岩礁の上に降り、梅原君や、中学生らが獲ったサザエでご飯を炊き、みんなで食べた。サザエの切身が米粒より多く入っている本当にうまいサザエ飯であった。

これは梅原君から聞いた話で、その場に居合わせた訳ではないが、あるとき、西郷町の港にツチクジラが迷い込み、島中から見学者が来た。梅原君と中学校の先生たちは、漁師や子供らと一緒にクジラの尾に綱をつけ、大きな松の木に滑車で引き寄せ、沖に戻したと言っていた。こんな面白いことをした友人はほかにいない。一週間くらい滞在しているいろいろな体験をした。彼はその後、会計士試験に合格した。

大学を卒業して、自宅で受験勉強をしていた四日市の伊藤堯夫君のお宅にも伺った。彼の父は、名古屋のトヨタグループの初代監査人という公認会計士の草分け的存在であった。彼は大学院に入らず、後に会計士試験に合格した。

青山学院大学商学部から、関学の商学部大学院入ってきた吉田弘君から、「高校教員になろう。そのため、高校教員免許状(商業科)をとろう」と誘われた。夏休みに集中講義(教育心理学、

商業科教育法などの専門科目）を受講し、不足している単位を取得した。教員免許を取得するために修得した単位は、一般教養科目三十六単位、教科に関する単科目六十二単位、教職に関する専門科目十四単位と免許状の裏面に記載されている。

困ったのは教育実習である。出身校である社高校にお願いして二週間、商業科のそばんや簿記の授業実習をさせていただいた。これは本当に苦労した。

大抵の資格試験は筆記試験であるが、教員免許状を取得するためには、筆記試験ばかりではなく、実習が必要である。人に教えることの難しさもさることながら、人前で立って話し、杖を持ちながら板書することはもちろん、生徒諸君の、特に女子生徒の遠慮のない凝視に耐える苦痛は相当なものであった。しかし、開き直って慣れてしまえば何でもない。後に、経理専門学校講師をするときには大いに役に立った。

「高等学校教諭一級普通免許状・商業科・昭和四十二・高一級・第一号」は、私の持つ資格で一番難儀して取得した資格である。吉田君は大学院修了後、大阪市立扇町商業高校などの教諭になった。彼の免許状はたぶん第二号だろう。理由は書類を兵庫県教育委員会に提出した順番による。

教育実習と併せ、普通車の運転免許証を取得した。この頃からオートマティックの普通車が普及し、障害者にも普通自動車の運転免許証が与えられるようになったが、左足で運転する車

はない。そこで中古車を購入して、町の自動車屋さんで左足仕様に改造していただき、その自動車を自動車学校に持ち込み練習、それをまた、試験場に持ち込みコースを走ってようやく運転免許証を取得することができた。

自宅の一番近くにあったN自動車教習所では教員がいないと断られたが、多可町中区にあった日自動車教習所の所長が、元警察署長で、父の知り合いであったので無理をお願いした。この地域で障害者の普通免許は、私が第一号であった。

大学二年生の一時期だけ家庭教師をしたが、アルバイトはほとんどしていない。アルバイトと言えば、和歌山の鈴木完次郎君らは、仁川の阪神競馬場でバイトをしていた。私は、単車で通用門から入り、鈴木君らの案内で中央競馬の観戦をした。

マンドリンクラブに入っていた金沢の松野修三君は、宝塚映画の時代劇のエキストラに出たと言っていた。この頃、飲食店や量販店などでバイトする者はほとんどいなかった。

何かと理由をつけて集まる学生コンパは、ほとんどが大阪の梅田か、心斎橋・難波界限で行われた。神戸の三宮や、元町にも行った。安い価格の酒と飲食で、わいわいがやがやと談論風発。阪神百貨店屋上のビアガーデンにもよく行った。今の三倍の量がある大ジョッキを飲んでいた。生涯のビール好きはこのときから始まっている。

この頃の社会情勢は、大学に入ってからすぐの昭和三十六年八月、ソ連がドイツにベルリンの壁

を構築、三十八年十一月、ケネディ大統領暗殺、四十一年六月全共闘会議の学生が早稲田大学本部を占拠などショッキングなニュースが続いた。三十六年九月、大相撲に拍鵬時代、三十七年八月堀江謙一、ヨットで太平洋横断、三十八年六月、黒四ダム完成、三十九年十月、東京オリピック開催、四十年六月、ビートルズ来日、四十一年四月「おはなはん」大人気など明るい話題が続いていた。私の関西学院大学時代は、生涯で最高のよき時代であった。